

研 究

5 歳児の問題行動

—縦断的研究から—

上田 礼子* 前田 和子*

I. はじめに

子どものもつ健康上の問題は子ども自身の疾病由来するものから、養育者の養育行動にかかわるものまで多岐にわたっている。しかし、これらの問題の解決にあたっては発達の観点から把握することが基本的に重要であり、著者らは昭和46年度に都内一定地域に出生した子どもとその養育者を対象に追跡的調査を実施してきている。すでに得られた結果については1歳児¹⁾、2歳児²⁾、3歳児³⁾をもつ母親のニード、および幼児の運動発達と発達スクリーニング⁴⁾と題してその都度報告してきた。これらの結果から幼児期の行動上の問題やいわゆる癖の出現率は子どもの年齢や性のみならず、出生順位にも関係することが3歳、4歳時の調査^{3,4)}で明らかになっている。このような子ども時代のいわゆる問題行動の発現には遺伝的要因を重視する立場からの報告⁵⁾もあるが、時代、地域、文化など子どもの住む環境要因も考慮しながら縦断的研究を行った実証的資料が少ないのが現状である。

本調査の目的は①5歳に達した子どものいわゆる問題行動の発現を調べ、②それらの出現に関与すると考えられる年齢、性のみならず同胞との関係を検討し、保健指導、相談に資することを目的としている。

II. 調査対象

調査対象は東京都足立区K保健相談所管内にて昭和46年5月から12月の間に出生した子どもをもつ母親全数であるが、相談所で実施された満1歳児健診を訪れ、その後著者らが追跡調査を継続し3歳児健診を受診した505人である。対象者の居住地区は都営住宅団

地の多い新興住宅地である。核家族が約80%を占め、一家族当たりの子ども数は2.1人であり、都市生活者の特徴を有している。

III. 調査方法

方法は質問紙調査法であり、対象児が満5歳0カ月～1カ月に達した時に質問紙を郵送し回収した。回収された資料の分析にさいしては、記入不備のため無効となった15人を除外し、312人を対象としたが、発達遅滞・身体的異常のある障害児8人をS群として設定し、健常児294人N群とは別に検討した。

質問紙の内容は、①おもなる既往疾患と現症および心配、相談事項、②5歳時の発達評価項目、③子どもの行動上の問題や癖に関する項目、④家族構成や対象者の属性に関する事項である。

また、同一対象者の3歳児健診時の資料を参照して5歳時と比較検討した。

IV. 結 果

1. アンケートの回収率、社会的背景

質問紙の回収率は62.8%(505人中317人)であった。37.2%の者は3歳から5歳にかけて転居、その他の理由により回収できなかった(表1参照)。

表2は今回の分析対象となった健常児294人から双生児1組を除外した292人の両親について、その社会的背景を示す1つの資料となる学歴を示している。両親ともに義務教育卒が約4割、高校卒が5割であった。

2. 5歳児の問題行動

母親の記載による満5歳児の行動上の問題および癖

表1 満5歳時アンケート回収状況

分 類		実 数	%
回 収	有 効		
	健 常 児	294	58.2
	障 害 児	8	1.6
	無 効	15	3.0
転 居・その他		188	37.2
合 計		505 人	100 %

表2 両親の学歴

分 類	父		母	
	人数	%	人数	%
義務教育卒	115	39.4	129	44.2
高校卒	137	46.9	146	50.0
短大卒	0	0.0	7	2.4
大学卒	29	9.9	2	0.7
その他・不明	11	3.8	8	2.7
合 計	292人	100%	292人	100%

表3 満5歳時の問題行動

順 位	項 目	全 体	男 児	女 児
1	夜 尿	18.7%	18.6%	18.8%
2	夜 尿 ***	15.6	22.4	8.0
3	偏 食	9.5	8.3	10.9
4	毛布・タオルなどはなさない **	9.2	13.5	4.3
5	指しゃぶり	8.8	7.1	10.9
6	爪 か み	8.8	8.3	9.4
7	ぜんそく	8.2	10.9	5.1
8	チック様しぐさ*	7.8	10.9	4.3
9	熱がやすい、吐きやすいなど	4.8	5.1	4.3
10	人みしり強い	4.4	3.8	5.1
11	ひきつけ	4.4	5.1	3.6
12	ものの順序にこだわる	4.1	3.8	4.3
13	ひどいかんしゃく	3.1	3.8	2.2
14	性器さわり	3.1	4.5	1.4
15	ど も る	1.7	0.6	2.9
16	友達に無関心	0.7	0.6	0.7

総数 294人 性差あり *P<.05
 男児 156人 **P<.01
 女児 138人 ***P<.001

するの種類の出現率は表3に示すごとくであった。最

も頻度の高いものは、

いわゆる夜驚、第2は夜尿、第3は偏食であった。

夜尿、毛布、タオルなどはなさない、チック様し

表4 年齢による問題行動の変化

順 位	3歳 505人中		→	4歳 406人中		↔	5歳 294人中	
	項目	%		項目	%		項目	%
1	夜 尿	32.1		夜 尿	20.9		夜中に突然泣きだしたり起き上がる	18.7
2	夜中に突然泣きだしたり起き上がる	30.7		夜中に突然泣きだしたり起き上がる	20.7		夜 尿	15.6
3	毛布・タオルなどに執着	18.4		偏 食	17.7		偏 食	9.5
4	指しゃぶり	15.5		指しゃぶり	14.0		毛布・タオルなどに執着	9.2
5	理由なく吐きやすい、発熱しやすい	9.6		毛布・タオルなどに執着	13.8		指しゃぶり	8.8
6	性器にさわる	9.4		チック様しぐさ	8.6		爪 か み	8.8
7	人みしり強く母から離れない	7.4		爪 か み	8.4		ぜんそくをおこす	8.2
8	ひきつけ	6.3		性器にさわる	8.1		チック様しぐさ	7.8
9	ぜんそくをおこす	6.2		人みしり強く母から離れない	6.4		理由なく吐きやすい発熱しやすい	4.8
10	爪 か み	6.0		ひどいかんしゃく	5.8		人みしり強く母から離れない	4.4
							ひきつけ	4.4

ぐさの3項目には性差が認められ、いずれも女兒に比べて男児に有意に多く認められた。

3. 3歳児と5歳児との比較

いわゆる問題行動の上位10項目について同一被験児の3歳時と5歳時とを比較して年齢による変化を横断的に検討した結果は表4のごとくであった。すなわち、夜尿と夜中に突然泣きだしたり起きあがる行動はともに3歳時と5歳時に1位ないし2位を占めていたが、毛布、タオルなどに執着する行動は3歳時の3位から5歳時に4位にさがり、減少の傾向を示していた。

一方、これら上位3つの項目について3歳から5歳までの変化を縦断的に(個人ごとに)検討した結果、3歳時夜尿のある95人のうち5歳時にもなお夜尿ある者は36人、37.9%であった。言いかえれば、約6割の者は夜尿を消失していた。同様に3歳時に夜中に突然泣きだしたり起きあがる85人のうち5歳時にもこの行動のある者は38人44.7%であり、3歳時に毛布、タオルなどに執着する47人のうち5歳時にも同じ癖のある者は21人44.7%であった。一方、5歳児に夜尿ある者44人(3歳時不明の2人を除く)のうち8人18.2%は3歳時に夜尿がなく、5歳時に発生していた。

4. いわゆる問題行動と同胞数および同胞との年齢差

表5は対象児を同胞数と性別によって分類した結果を示している。1人っ子は全体の8.6%、同胞1人の者は62.3%、2人以上の者は28.1%であった注)。また、

表5 対象児の同胞数と性別

同胞数(注)	性別	全体	男児	女児
0(一人っ子)		25 8.6	9 5.8	16 11.8
1人		182 62.3	99 63.5	83 61.0
2人以上		82 28.1	45 28.8	37 27.2
不明		3 1.0	3 1.9	0 0
計		292人 100%	156人 100%	136人 100%

注) 同胞数は対象児を含まないきょうだい数であらわす

表6は対象児を出生順位によって分類した結果を示している。長子は全体の33.9%、中間は12.3%、末子は44.2%であった。

まず、出生順位に関係なく同胞数によっていわゆる問題行動の出現率に差があるか否かを検討した。その結果は表7に示すごとく、夜尿の1項目にのみ有意差

注) 同胞数は対象児を含まないきょうだい数であらわす。以下同様である。

表6 対象児の出生順位

出生順位	性別	全体	男児	女児
長子		99 33.9	54 34.6	45 33.1
中間		36 12.3	19 12.2	17 12.5
末子		129 44.2	71 45.5	58 42.6
一人っ子		25 8.6	9 5.8	16 11.8
不明		3 1.0	3 1.9	0 0
計		292人 100%	156人 100%	136人 100%

表7 同胞数からみた問題行動

項目	同胞なし(一人っ子) 25人	同胞1人 182人	同胞2人以上 82人	計(n=) 289人
夜尿	24.0	19.8	15.9	19.0
夜尿*	4.0	13.7	24.4	15.9
偏食	16.0	9.3	8.5	9.7
毛布・タオルなどはなさない	16.0	9.3	7.3	9.3
指しゃぶり	8.0	6.6	14.6	9.0
爪かみ	8.0	9.3	7.3	8.7
せんそく	8.0	7.7	9.8	8.3
チック様しぐさ	4.0	8.2	8.5	8.0
熱がやすい、吐きやすいなど	0.0	4.4	7.3	4.8
人みしり強い	8.0	4.4	2.4	4.2
ひきつけ	0.0	3.8	6.1	4.2
ものの順序にこだわる	0.0	3.3	3.7	3.1
ひどいかんしゃく	0.0	3.3	1.2	2.4
性器さわり	4.0	2.7	3.7	3.1
どもる	0.0	3.3	0.0	2.1
友達に無関心	0.0	0.5	1.2	0.7

*同胞2人以上>一人っ子 p<0.05

注1) 但し 双生児1組と同胞数不明者3人 計5人を除く 289人について検討

が認められた。すなわち、満5歳時で夜尿のある者は1人っ子で4.0%、同胞1人の者で13.7%、同胞2人以上の者で24.4%あり、同胞2人以上の者は1人っ子に比較すると有意に夜尿の頻度が高かった(表7参照)。

次に、これらの問題と同胞数のみならず、同胞間の年齢差にも注目して検討を試みた。まず、対象児を同胞との年齢差を考慮して3群に分け、1人っ子の者をI群とし、年子の同胞のいる者をII群、その他をIII群として設定した。これらIIおよびIII群と同胞数との関係は表8に示すごとくであり、同胞数が2人群より3人、4人以上の群に年子の同胞をもつ子どもが明らかに多かった。

さらに、これら3群の間で問題行動の上位16項目について比較した結果、問題ありとする者は全体としてIII群よりII群に多い傾向が認められたが、有意差はなかった。しかし、それぞれの項目ごとに3群の比較を

表8 同胞数別によるⅡ群, Ⅲ群の割合

同胞数	Ⅱ群	Ⅲ群	計
1人	8.8%	91.2%	100%
2人	18.9	81.1	100
3人以上	50.0	50.0	100

同胞数1人: 182人
2人: 74人
3人以上: 8人

表9 同胞間の年齢差からみた問題行動

項目	Ⅰ群 (一人っ子) 25人	Ⅱ群 (年子) 34人	Ⅲ群 (その他) 230人	計 (n) 289人
夜尿	24.0%	17.6%	18.7%	19.0%
夜尿***	4.0	38.2	13.9	15.9
偏食	16.0	11.8	8.7	9.7
毛布・タオルなどはなさない	16.0	14.7	7.8	9.3
指しゃぶり	8.0	5.9	9.6	9.0
爪かみ	8.0	11.8	8.3	8.7
せんそく	8.0	14.7	7.4	8.3
チック様しぐさ	4.0	11.8	7.8	8.0
熱がやすい、吐きやすいやなど	0.0	11.8	4.3	4.8
人みしり強い	8.0	5.9	3.5	4.2
ひきつけ	0.0	0.0	5.2	4.2
ものの順序にこだわる	0.0	2.9	3.5	3.1
ひどいかんしゃく	0.0	0.0	3.0	2.4
性器さわり	4.0	5.9	2.6	3.1
どもる	0.0	2.9	2.2	2.1
友達に無関心	0.0	0.0	0.9	0.7

***Ⅱ群>Ⅰ群 p<.001
Ⅱ群>Ⅲ群 p<.001

注1) 但し 同胞不明の者3人と双生児1組 計5人を除く 289人について検討

すると、夜尿の出現率はⅠ群4.0%、Ⅱ群38.2%、Ⅲ群13.9%であり、Ⅱ群はⅠ群およびⅢ群より有意に高かった(表9参照)。

そこで、5歳時の夜尿と「弟、妹の出生」との関係を検討するために満3歳時の資料を参照して次のような検討を行った。すなわち、表10に示すごとく、満3歳時に夜尿があり、5歳時にもなおおねしょのある者をA群とし、一方3歳時にはあったが5歳時には消失した者をB群、3歳時には夜尿がなかったが5歳時には発現するようになった者をC群、3歳時と5歳時ともに夜尿のない者をD群とし、満3歳から5歳の期間における弟、妹の出生の有無に関してA、B、C、Dの各群の間で比較した。しかし、出生ありの者はA群13.9%、B群18.6%、C群12.5%、D群17.1%であり、4群の間に差はみられなかった。

表11はA、B、C、D群を同胞数によって比較した

表10 弟妹の出生と夜尿との関係

群	対象児3歳→5歳間に弟・妹の出生あり	なし	不明	計
A	13.9	83.3	2.8	100
B	18.6	79.7	1.7	100
C	12.5	87.5	0.0	100
D	17.1	79.3	3.6	100
合計	16.9%	80.1%	3.0%	100%

総数267人(但し、3歳時資料で不明の者25人を除外した数)
A群: 36人(3歳にも5歳にも夜尿あり)
B群: 59人(3歳にあるが5歳に消失)
C群: 8人(3歳にないが5歳に夜尿あり)
D群: 164人(3歳にも5歳にも夜尿なし)

表11 同胞数と夜尿との関係

群	同胞なし (一人っ子)	同胞1人	同胞2人以上*	不明	計
A	2.8	55.6	41.6	0.0	100%
B	8.5	71.2	20.3	0.0	100%
C	0.0	62.5	37.5	0.0	100%
D	9.1	62.8	26.2	1.8	100%

注) 総数267人(但し、3歳時資料不明の者25人を除外した数)
A群 36人 *同胞2人以上 A群>B群 p<.05
B群 59人
C群 8人
D群 164人

結果を示している。同胞2人以上の者はB群よりA群に有意に多く、また、D群よりA群に有意に多かったが、A群とC群との間には有意差がなかった。

5. 1人当たりの問題行動およびぐせの出現頻度

表12は母親がみた5歳児の問題行動を子ども1人当

表12 問題行動の数と同胞数・出生順位との関係

同胞数・出生順位	問題行動の数							計
	0	1	2	3	4	5	6	
1人	11	8	2	2	1	1		25
2人	長子	36	19	16	8	7		86
	末子	46	22	15	6	5	1	96
3人	長子	5	3	2	2	1		13
	中間	10	11	6	3		1	31
	末子	10	10	6	4			30
4人以上	中間		3		2			5
	末子	2		1				3
不明	2		1					3
計	122	76	49	27	14	2	1	292人
	41.8	26.0	16.8	9.2	4.8	0.7	0.3	100%

たりの項目数から検討した結果である。問題となる行動やくせが全くない者は全体の約40%あったが、5つ以上の問題行動をもつ者は292人中4人、1.4%あった。また、これらの1人当たりの項目数と同胞数および出生順位の間には有意な関係が認められなかった。

なお、3歳時に明らかな障害があると認められたS

表13 5歳時の問題行動の有無
— 3歳時に障害ある者について—

項目	事例							
	T.	H.	S.	K.	T.A.	Ko.	A.	H.
3歳児IQ%	114	32	不能	不能	32	32	69	59
夜驚		○			○			
夜尿					○			
偏食		○						
毛布、タオルなどに執着			○					
指しゃぶり					○	NA		
爪かみ		○						
せんそく								
チック様しぐさ						NA		
吐きやすい、熱やすい								
入みしり強く母から離れない								
ひきつけ								
ものの順序にこだわる								
ひどいかんしゃく								
性器にさわる		○						
どもる		○			○			
友に無関心						○		
合計数	0	5	1	0	5	0	0	0

但し Tは 弱性まひ
Hは Down症
Kは 原因不明の先天性疾患、発達遅滞
S, T.A, Ko, A, Hは 発達遅滞
NAは母親がチェックしなかった項目

群について5歳時の1人当たりの問題行動の出現状況は表13に示すごとくであった。すなわち、障害があっても母親のみた問題行動の観点からは2つの群に大別されることが知られ、全くこれらの問題のない者と数種類の問題行動をもつ者とであった。

V. 考 察

この調査における問題行動とは“養育者が心配したり、困ったりするような子どもの行動やくせ”のことを意味している。これらのいわゆる問題行動を一過性のものであると考えるか、あるいは、小児神経症の症状として取り扱うかということに関しては議論のあるところであり、最近では幼児期からの追跡的調査結果の報告も散見されるようになった⁵⁻⁷⁾。

一方、これらの問題行動には地域差もあることが知られるようになり⁸⁾、また、障害児の早期発見と教育的支援の視点から検討されるようになって^{2,3)}。しかし、一般に、この種の調査の多くは横断的方法によるものであり、得られた結果が年齢的要因によるものか、年齢以外の対象児の属性によるものかの判断が困難な資料も少なくなく、一方、縦断的方法では対象が特殊な集団であったりすることが多い。

著者らは同一地域に出生した子どもを乳児期から追跡してきており、これらの幼児が満5歳に達した時に調査を実施し、次のことが明らかになった。

1. いわゆる問題行動の発現率

5歳時に最も頻度の高い問題行動は夜驚18.8%、第2位は夜尿15.8%、第3位偏食9.6%であった。これは著者ら¹⁾が同一地域で昭和45年生まれの5歳児932人を対象として実施した時に得た調査結果と比べ、頻度が類似しており、夜驚19.2%、夜尿は12.4%はほとんど同じであった。また、上位16項目の頻度に関して、偏食以外には大きな差は認められず、この地域の5歳児の問題行動の特徴を示していると考えられた。夜驚や夜尿の頻度は米国カリフォルニアの5歳児の資料⁹⁾、夜尿の頻度はデンマークの6歳児の資料³⁾とほとんど類似しており、これらの問題行動の頻度は5~6歳児の普遍的特徴を示唆しているようでもある。

しかし、偏食に関しては前回調査の5歳児には22.8%、上位第2位であった結果と比べて頻度に差があった。これは全国的規模で実施された5~6歳児の乳幼児健康度調査¹⁰⁾の中にある1調査項目である偏食の頻度22.0%と比べても少なかった。偏食の頻度に差がみられた理由はアンケートを記入した母親自身が偏食をどのように捉えているかによると考えられるが、今後はアンケートの質問の設定の仕方も含めて検討を要すると考えられる。

問題行動の中で性差の認められたのは夜尿、毛布、タオルなどをはなさない、チック様のしぐさの3項目であり、いずれも男児に出現頻度が高かった。夜尿に関してはW.C. Oppel¹¹⁾が5歳児の81%がしじらなくなり、女児のほうが男児に比べて若干早い傾向にあるという報告と一致する。他の2項目については同様な5歳児の調査結果がなく今後の検討を待たなければならない。

2. 問題行動の推移と同胞との関係

J. W. Macfarlane⁹⁾ および C. W. Valentine¹²⁾ は健全な子どもにも発達に伴う一過性の問題行動があり、それらの種類や頻度は年齢によって増減したり、あるいは年齢によってあまり変化のないものがあることを指摘している。3歳から5歳にかけて夜尿、夜驚、毛布、タオルなどに執着する行動は10~30%の子どもにあって上位を占めていたが、これらの項目の頻度は年齢とともに著明に減少する傾向を示していた。しかし、個人ごとに詳細に推移を検討すると3歳時にはなかった夜尿が5歳時には発生している者が17.4%あり、この時期が種々の要因によって問題行動を発生する不安定な時期であることを示唆している。

問題行動と同胞数および同胞との年齢差との関係を検討した結果、夜尿のみに有意な関係が認められた。すなわち、同胞数3人以上の者は1人っ子より夜尿が多く、また、同胞との年齢差を考慮すると年子の同胞のある者は1人っ子群およびその他群よりも夜尿は有意に多かった。また、3歳時、5歳時ともに夜尿がある者、3歳時に夜尿があっても5歳時に消失している者、3歳児になく5歳時に発生した者、3歳時、4歳時ともに夜尿のない者について3歳から5歳の期間に弟妹の出生の有無を4群で比較した結果、4群間に差はなかった。むしろ、3歳、5歳ともに夜尿のある群には5歳で消失した群に比べて同胞2人以上の占める割合が有意に多かった ($p < .05$)。

これらの結果は満5歳時の問題行動のうち、同胞数とその年齢差の観点から注目されるのは夜尿であること、そして、“弟妹の出生が夜尿の要因となる”という一般的な意見は満3歳以降の幼児に関しては必ずしもあてはまらないこと、むしろ同胞数が多く、その年齢が近すぎることと関係していることを示唆している。言いかえれば、排泄習慣の形成には子ども自身の遺伝的素因^{13,14}もさることながら、養育者側のタイミングのよい対応や細かい配慮が必要であり、同胞数が多いことはこれらを妨げる条件の一つとなっていると推測される。

3. 問題行動と障害児

母親の記入した問題行動は身体的障害や知的発達遅滞のある子どもの診断とは必ずしも一致しなかった。これは障害があっても、親が受容して養育している場合には問題行動とはならない傾向があるし、また、障害の種類や程度にも関係するためと考えられる。しかし、行動上の問題をひとりで重複してもつ事例もあり、健常児と同じようにみえる行動上の問題やくせが一過性ではなく、質的に異なった様相をおびてきていることも推測された。

同一対象児を追跡するとともに異なる地域の小児をも対象にし、子ども時代のいわゆる問題行動の推移とその意味を生活環境との関連の上で検討することは今後に残された課題である。

VI. ま と め

東京都のK保健相談所管内で昭和46年5月から12月までに出生し、著者らが長期追跡的研究を実施してきている対象児が満5歳に達した時に調査を実施した。その結果、①5歳児に出現する行動上の問題やくせの種類と頻度、②年齢や性によって頻度の異なる問題行動の種類、③同胞の数やその年齢差に関係する問題行

動としての夜尿、④障害児の問題行動の特徴などが明らかになり、今後の課題について論じた。

(附記：この調査に協力いただいた東京都足立区保健相談所の職員の方々に感謝します。また、この論文の要旨は第23回日本母性衛生学会、京都、昭和57年10月に発表しました)

文 献

- 1) 山本早苗, 上田礼子, 小沢道子・他：1歳児をもつ母親のニードについて。小児保健研究, 33(2)：286-290, 1974.
- 2) 上田礼子, 塩福和子, 平山宗宏・他：2歳児をもつ母親のニード。小児保健研究, 34(3)：137-143, 1975.
- 3) 上田礼子, 前田和子, 平山宗宏：3歳児をもつ母親のニード。小児保健研究, 35(3)：134-138, 1976.
- 4) 上田礼子, 前田和子, 山梨靖夫：幼児の運動発達と発達スクリーニング, 発達の縦断的研究成績より。総合リハビリテーション, 6(7)：910-914, 1978.
- 5) 阿部和彦編：小児の問題行動と自覚症状。金剛出版, 1982.
- 6) 浜崎和子：児童の情緒問題に関する追跡的研究—3歳児健診における問題を中心に。精神経誌, 72(5)：484-504, 1970.
- 7) 上田礼子, 山崎喜比古：幼児期の発達過程に伴う問題。公衆衛生, 40(8)：580-584, 1976.
- 8) Kastrup, M: Urban-rural differences in 6 year olds. ed. by Graham, P.J., Epidemiological Approaches in child Psychiatry, Academic Press, p 181-194, 1977
- 9) Macfarlane, J.W. et al.: Developmental study of the behavior problems of normal children between twenty one months and fourteen years. ed. by Johnes, M.C. et al., The Courses of Human Development, Xerox College Publishing, Massachusetts, p 183-187, 1971
- 10) 日本小児保健協会：乳幼児健康度調査報告書, p 28, 1980.
- 11) Appel, W.C., Harper, P.A. and Rider, R.V.: The age attaining bladder control. Pediatrics, 42: 614, 1968
- 12) Valentine, C.W.: The Normal child. Penguin Books, p 39, 1962
- 13) 阿部和彦, 天富美弥子：幼児の行動特徴の遺伝的側面と成長に伴う変化について。精神医学, 12(8)：6-17, 1970.

- 14) Abe, K. : Parent-child transmission of some childhood behavior characteristics. Act Paedopsychiat., 44 : 9, 1978